

[一]

次の——線部について、漢字をひらがな、カタカナを漢字に直しなさい。

- ① 不正取引の横行をふせぐ。
- ② 書類を回覧する。
- ③ 便乗値上げが行われる。
- ④ 真実を告げる。
- ⑤ 作戦を練る。
- ⑥ 苦しむ人をキュウサイする。
- ⑦ 手をセイケツにする。
- ⑧ 名前をレンコする。
- ⑨ 努力にムクいる。
- ⑩ 目をソムける。

[二]

次の問いに答えなさい。

問一 次の1～3の——線部はどこにかかりますか。——線部の中から適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 ふと 窓の外を 見ると そこは 一面の 銀世界だった。
- 2 大空を ゆうゆうと 流れ行く 雲は まるで 真っ白な綿のようだ。
- 3 ひさしぶりに おさななじみの 友達と 公園で 楽しく遊んだ。

問二 次の1～4の熟語は、二つの漢字の間に意味の上でどのような関係がありますか。後の中から適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 貴重
- 2 非常
- 3 過信
- 4 苦笑

- ア 反対や対になる意味の字を組み合わせたもの。(例…強弱)
- イ 同じような意味の字を組み合わせたもの。(例…岩石)
- ウ 上の字が下の字の意味を説明しているもの。(例…善人)
- エ 下の字から上の字へ返って読むと意味がよくわかるもの。(例…登山)
- オ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの。(例…不足)

問三 次の1～3の——線部と同じ種類・用法のものを後の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 全員に当てはまるとは限らない。
- ア そういう食べ方はみっともない。
- イ 失敗するなんて情けない。
- ウ 思ったほど冷たくない。
- エ 注文した品物の数が合わない。

- 2 子供ながらよく気がつく。
- ア 知っていながら知らないふりをする。
- イ 歌を口ずさみながら歩く。
- ウ 生まれながらの天才だ。
- エ 昔ながらの町並みが見られる。

- 3 優勝者が決まったようだ。
- ア 赤いほががリングのようだ。
- イ まるで絵画のようだ。
- ウ 明日の天気は雪のようだ。
- エ 書類の量が山のようだ。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。（句読点や記号も一字にかぞえること。本文の行末にある数字は行数です。）

練習はいつも川原でやる。雑草だらけだけど、かなりの広さだし、野球やサッカーができるいどには整備されている。

四、五年前、土手が産業道路になって、川原には工場が建ちならぶはずだったけど、町の人たちの長い反対運動で、そのままぼくらの遊び場になっている。町の人たちが署名運動したり、なんべんも請願にいったりした。ブルドーザーがきたときは、すわりこみまでやった。おっちゃんなんて、もうすこしでつぶされそうになったけど、動かなかった。

そうやって残された遊び場なんだけど、川原で遊んでる子って、このごろ、あまり見かけなくなった。

三、四年前までは、野球でもなんでも、場所を取るのがたいへんだった。場所取り合戦で、けんかもしよっちゅうだった。

「場所を取っとけ。」

と、上級生たちにいわれて、ぼくら、ほかのチームの子らになぐられたりけられたりしながらも、ホームベースにだきついてグラウンドを守ったこともあった。もちろん親たちにはしかられたけど、赤チンと青あざだらけになって、ほこらしく登校した。①そんなこと、いまではうそみたいだ。

川原は、がらんとしてる。

ぼくらの使ってるあたり以外は、雑草がのびほうだいになってる。

「だけど、あいつらのいいぶんもきいてやれや。いいな？」

それで、ぼくらは二人がくるまで、柔軟体操②を続けた。

しばらくやってたら、出前のとちゅうのおっちゃん③が、「ブラック

「キャット、ファイト！」と、土手の上から手をふっていったけど、ぼくら、はずかしくて、いせいのいい声もでなかった。

六年生の二人は、一時間近くもおくれてやってきた。ペろペろとアイスクリームをなめながら、ユニホームのボタンをペろんとはずして、のたらくたらとバットを引きずってやってきた。

「このばか暑いのに、やっぱ、やるのかよ。」

「喫茶店は最高だぞ。いかねえか。」

平気な顔で、そんなことをいった。

岸さんは、なにもいわない。ガンちゃんもだまつてる。

「むりしてやってもらわなくてもいいんだよな。」

と、ぼくはいつてしまった。そんないいかたで話し合いをはじめるつもりはなかったのだけど、むかむかしちやって、とうとうけんか④になった。

「てめえ、もういつぺんいつてみる！」

と、小田がにきび面をつきだしてきた。男性化粧品⑤のにおいがした。

「なんべんでもいうさ。レギュラーなら、レギュラーらしく、まじめに練習したらどうなんだよ。」

ぐつとはらに力をいれて、おちついていったつもりだったけど、やつぱり声がふるえてしまった。

「このやろう、六年生に向かって！」

肥満ぎみの中野が、ぼくのむねをどついた。ぼくはあっさりふつとばされた。すごい力だ。これでヒットが一本も打てないんだから、ど

その日、やくそくの二時に集合したときも、川原にはだれもいなかった。

ブラック「キャット」のメンバーの集まりも悪かった。

二時までにきちんと集合したのは、六年生ではキャプテンでキャッチャーの岸さん、サードのガンちゃん。五年生ではライトの洋太くん、センターの弓削くん、レフトの岬くん、そしてショート⑥のぼく、――全員だといいたことだけど、かんじんのピッチャー吉野くんは、めずらしいことにちこくだった。それでも、十五分くらいおくれただけで、あせだくになってかけつけてきた。四年生では補欠の誠、同じくケラぼう、ちよつと補欠にもむりみたいなニカちゃんだ。とにかく、レギュラーのファースト小田、セカンド中野の二人は、なかなかすがたを見せなかった。

「レギュラーが、こんなこといいんですか。」

と、ぼくはA⑦して、岸さんにいった。

「きょうは、練習は始める前に、ミーティングやってくれませんか。」

ぼくら、もう、うんざりなんです。」

と、ぼくはしつこくせまった。

「ああ、わかってる。」

と、岸さんもはらにすえかねたように、土手のほうをちらちら気にしながらいった。

うしようもない。

「すもうにでも転向したら。」

と、ぼくはのろのろと立ちあがりながら、にくまれ口をきいた。

「てめえ！」

中野の白い顔がぱつと赤くなって、ゆつくりとバットをふりあげた。「暴力反対！」

と、洋太くんが大きな体で中野をはがいじめにした。中野がふりほどこうとしても、洋太くんは動かない。わめいてあばれる中野に、

「やめろ。」

と、岸さんがめんどくさそうにいった。

「ボールも打てないで、人間が打てるかよ。」

くだらねえというふう⑧に、ぺつとつばをはいた。

ぼくらは、あれ？ というような顔で岸さんを見て、ちらちら中野と小田をうかがいながら、はははとわらった。

「なんだよ、岸、おまえ、こいつらの味方する気かっ。」

と、小田がけしきばんでつめよった。

岸さんは、じろつと小田をにらみつけただけだった。「しんぼうしてきたつもりだけだな、おれも、もう、おまえらにはうんざりだ。」

岸さんは、小田と中野をもういちどにらみつけて、

「ガンちゃん、もういいだろ？ あとは、たのむぜ。」

青バットにキャッチャーミットを通すと、ぼくらをちらつとながめまわして、

「じゃあな。」

と、土手を登りはじめた。

ぼくらはじようだんだと思つてた。
でも、キャプテンの岸さんは、後ろも見ないで **B** いってしま
う。

「岸さん！」
ぼくらはびっくりして、口々によんだ。

「そりや、ないでしよ、キャプテン！」

「ブラック・キャットは、どうするんですか！」

「——悪いな。」

と、岸さんは土手の中腹で、ようやくふりかえつた。

「おれあ、キャプテンでがらじゃねえよ。もう、うんざりだよ。」

たつたつと、身軽く斜面をかけ登つて、土手の向こうに消えてしま
つた。

からつぽの土手を見つめて、^⑦ぼくらはぼうぜんとしていた。

そんなぼくらを見て、きゆうに小田と中野が、へらへらわらいだし
た。

「かつこつけやがつて。けつきよくは、わが身がかわいいのさ。」

「せいせいして、リトル・リーグにいきやがつたぜ。」

「頭は悪いけど、野球はまあまあだからな。」

「ブラック・キャットのためなんてふりしてたけど、いままでは、

リトル・リーグの試験にパスしなかったんじゃねえの。」

「きまつてるさあ。でなきや、こんなぼろチームのために、だれがあ
くせくするかよ。」

二人が口ぎたなく岸さんをのしるのを、ぼくらはだまつてきいて
いた。

岸さんが、^⑧精銳の集まるリトル・リーグにいきたがつてるとい
う

ほうをさししめした。

二人はびっくりして、ガンちゃんを見つめてる。

「本気かよ？」

と、不安そうな顔になった。

「そうさ、ふざけるんじゃないよ。」

と、ぼくはうれしくなつてさげんだ。

「やめたいやつは、やめりゃいいんだ。ブラック・キャットは、お
れたちが続けていくよ！」

うれしいのか、くやしいのか、よくわからなかった。みつともない
けど、なみだでみんなの顔がぼうつとしてしまった。

「なにをそんなにりきんでるんだよ。」

「たかが草野球じゃねえか。」

小田と中野は、ガンちゃんとぼくのけんまくにとまどつていたけど、

「まあ、しつかりやれや。」

「たまには、さしいれくらいしてやるよ。」

と、へんにやさしい口ぶりになって、なんだかさみしそうに帰つてい
つた。

ぼくらは、^⑨ぼかつとからつぽな気持ちになつて、しばらく、夕焼け
の土手をながめていた。

(後藤竜二『キャプテンはつらいぜ』講談社より)

* 本文は設問の都合上、一部表記を改めてあります。

※1 赤チン……かつて家庭でよく用いられた傷薬の通称。

※2 欽ドン……かつての人気テレビ番組の略称。

うわさは、ぼくらもきいていた。それだけの実力があることも、よく
知っていた。それでも、万年びりのブラック・キャットをひきいて
がんばつてくれると思つて、すくなくとも^⑩ぼくは、岸さんをそんけ
いしていた。だから、小田と中野に対する不満も、岸さんがいつか解
決してくれるだと思つて、ずっとしんぼうしてきた。

それなのに、このかんじんなときに、こんなかたちで投げだされる
なんて——！

キャプテンでがらじゃない、と岸さんはいった。そのとおりだ！

と、ぼくは思った。^⑪岸さんは、キャプテンなんかやつちやいけない人
だつたんだ。一人で、ずっと、リトル・リーグをねらつていればよ
かつたんだ！

だけど、そのキャプテンを信じてやつてきたぼくらは、どうなるん
だ！ ブラック・キャットは、どうするんだ。

「解散だな。」

と、小田が勝ちほこつたようにいった。

「だいたいよう、町内会の少年野球なんて、町内会のじいどもよろ
こばせるだけだぜ。」

「健全な青少年の育成のために、とかなんとかな。」

二人はまたばかわらいをして、

「ブラック・キャット解散、決定！」

と、^{※2}欽ドンアクションをまねしていった。

すると、ずつとだまりこくつてたガンちゃんが、バットをにぎつて、
すつと立つた。

「やめたけりや、ごたくならべずに帰れよ。」

バットを持ったうでをまっすぐにのばして、岸さんの消えた土手の

問一

A・

B

に当てはまる言葉として最も適当なものを

次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A
ア そわそわ イ びくびく
ウ じりじり エ うずうず

B
ア ふらふら イ ずんずん
ウ いそいそ エ のそのそ

問二

線部①「そんなこと、いまではうそみたいだ」とありま

すが、「ぼく」がこのように感じたのはなぜですか。その理由と
して最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア かつては川原の場所取り合戦に勝利した証として怪我もほこ
らしく感じられたが、今では場所を奪い合う必要もなく、何も
ない川原で遊ぶのは変わつていと思われているから。

イ かつて川原は子どもに人気のある遊び場だったが、今では整
備をされることもなくなり、雑草ものびほうだいで遊ぶことが
できなくなつてしまつたから。

ウ かつて上級生の命令は絶対で、下級生はその命令を守るため
にたとえ傷だらけになつてもグラウンドを守ってきたが、今で
はそういう乱暴なことをする子はいなくなつてしまつたから。

エ かつてはほかのチームの子と争い、傷だらけになつても確
保しなければならぬ川原のグラウンドだったが、今では遊ぶ
子も少なくなり、すっかりさびれてしまつていから。

問三 ——— 線部②「もう、うんざりなんです」とありますが、どのようなことにうんざりしているのですか。三十字以内で答えなさい。

問四 ——— 線部③「ぼくら、はずかしくて、いせいのいい声もなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 全員で勝利のためにがんばってはいるが、チームは常に負けて万年びりの状況だったから。

イ 練習時間に全員がそろふことすらできず、仕方なく柔軟体操をしているところだったから。

ウ 大人の声援に手をふり返してこたえるような子供っぽいことはしたくなかったから。

エ 練習に全員がそろふことすらできないチームを冷やかされているように思えたから。

問五 ——— 線部④「むかむかしちゃって、とうとうけんかごしになった」とありますが、それはなぜですか。次の中から適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小田と中野が下級生の前では強がって本心とは裏腹な行動をとっているのが分かったから。

イ 小田と中野に対して、同じ六年生の岸さんとガンちゃんは何句一つ言わずにだまっていたから。

ウ 小田と中野が大幅に時間に遅れたくせに、反省している様子すらなかったから。

エ 小田と中野が、待っていた者たちのやる気まで失わせるような発言をしたから。

問六 ——— 線部⑤「ぼくらは、あれ？ というような顔で岸さんを見て」とありますが、このときの「ぼくら」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 岸さんにチームをまとめる気がないことが分かり、がっかりしている。

イ 事の成り行きを無言で静観していた岸さんが初めて言葉をかけたことに驚いている。

ウ 六年生同士の仲間意識が崩れていく瞬間を目にし、とまどいを感じている。

エ キャプテンらしくない岸さんの投げやりな態度に違和感を覚えていている。

問七 ——— 線部⑥「ガンちゃん、もういいだろ」とありますが、このときの「岸さん」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今まで自分の考えや感情を押し殺してきたが、最後にすべてをさらけ出させてほしいという気持ち。

イ キャプテンという損な役回りを、そろそろガンちゃんに交代してもらいたいという気持ち。

ウ これまでキャプテンとしての責任を果たしてきたつもりだが、これ以上はがまんできないという気持ち。

エ たとえレギュラーであっても、暴力的な小田と中野をチームから外すのは仕方がないという気持ち。

問八——線部⑦「ぼくらはぼうぜんとしていた」とありますが、このときの「ぼくら」の様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 予想されていたこととはいえ、岸さんのいないチームの今後に不安を覚えていた。
- イ 岸さんがキャプテンの役目を嫌がっていたということを、悲しく受け止めていた。
- ウ 突然キャプテンの岸さんがいなくなってしまい、あつげにとられていた。
- エ 岸さんの言ったことはじょうだんなのか本気なのか、真意をはかりかねていた。

問九——線部⑧「ぼくは、岸さんをそんけいしていた」とありますが、どのようなところを尊敬していたのですか。三十五字以内で答えなさい。

問十——線部⑨「岸さんは、キャプテンなんかやっちゃいけない人だったんだ」とありますが、「ぼく」はなぜそう思ったのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 同級生には遠慮があつて本音を語ることができないような人だと思ったから。
- イ 精鋭の集まるリトルⅡリーグに価値を感じるような人だと思ったから。
- ウ 形勢が不利になると勝負から逃げてしまうような弱気な人だと思ったから。
- エ 途中でチームを投げ出してしまうような無責任な人だと思ったから。

問十一——線部⑩「ぼかつとからっぽな気持ち」とありますが、このときの「ぼくら」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 今回のもめごとでチームの主要なメンバーがいなくなってしまい、今までのブラックⅡキャットではなくなってしまったことをさびしく感じている。
- イ 言い争いに決着がついたのは良かったが、一方では力のあるメンバーがいなくなるという事態になってしまい、今さらながら自責の念を感じている。
- ウ ブラックⅡキャットへの愛着をなくしたメンバーをやめさせることには成功したが、今後ますます弱くなるチームで野球をすることにむなしさを感じている。
- エ これまでいっしょにやってきた三人ものメンバーがチームを去ることとなり、果たしてこれからチームが一つにまとまれるのかということに不安を感じている。

〔四〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。（句読点や記号も一字にかぞえること。本文の行末にある数字は行数です。）

人間もふくめて、もともと動物というのは、いつも飢えと隣り合わせに生きている存在だった——とコトのはじめから言いだしたら、いま、なんでもあきるほど食べることができない飢えを知らない人たちは、自分にはなんの関係もない話だと、シラケてソップを向くにきまっている。だが、動物は（人間も動物の一種だが）、残念ながら、飢えと共存していた。しかもそれが、ごくふつうの状態だったのである。たまには腹いっぱい食べることができた時期もあったかもしれないが、それはほとんど「瞬間的」なことで、すぐにだめになってしまった。なぜだろう。

動物にはそれぞれある一定の「縄張り」があり、それが行動範囲だとすると、その範囲内の餌をとって食べる、その場合、動物が一種類であろうと何百種類であろうとかまわれない。その範囲内にある可食物を考えると、かりに百匹き分の餌があるときには、その餌を食べる動物は、あつという間に百匹きになってしまう。

そうなるまで、つまり百匹き分の餌に対して動物が十とか二十匹きの場合だと、食べたい放題なのだが、それはせいぜい数週間あるいは数か月のことにすぎない。

かつて私は栃木県の山奥で次のような実験をしたことがある。まず一定区域内のウサギを全部消滅させて、そのあとどうなるかを観察する。〔A〕その区域外にいたウサギが、縄張りの外に新天地がで

きるだけ逃れたいのだが、飢えはあつという間にやってくる。そうになると、飢えを満たすことはきわめて困難だ。餌にゆとりがあると、すぐ定員を増やす。そこでいつもウッスラと飢えているのが常態である。コッテリ飢えると、弱いのが死んでしまつてバランスが保たれる。〔イ〕

いまの先進国の人間のように、ほうぼうから餌すなわち食糧をかき集めてくる能力ができたときには、言いかえれば、不足したらいくらでも餌を増やすことができるという条件が満たされることが可能になると、当然ながら飢えるという心配はなくなる。〔ウ〕

だが、〔I〕的な確保ができたとき、次に生ずる問題は〔II〕の向上に対する欲求である。

飢えのつらさから逃れたいという安楽追求願望は、人間の場合、まず量を満たそうとする努力となつて歴史の上に現われたが、おおむね量が満たされたとき、こんどは、まずいものからよりおいしいものへという安楽追求願望となつて現われてきた。〔エ〕

よりおいしいものというのは何かというと、たとえば日本の歴史で言うならば、縄文時代以前からずっと食べつづけていた、主食の最も大きい部分としての肉の蛋白質である。つまり、ごちそうとしての動物蛋白質をよけいに食べたいという願望が強烈になってくる。

ところがこうした「ごちそう」が一定して食べられないという期間があまりにも長かつたために、人間の体は——人間だけでなく一般に動物の体は、そうした状況に適応させられ、生理機構にまで刷り込まれてしまっている。

文明化して、〔III〕への願望が満たされ、さらにごちそう、すなわち動物蛋白質の十分な摂取という長い間の先祖代々の願望が満たされ

たとばかり、たちまち入り込んで住みつく。そのとき、めすウサギの腹の中にいる子どもの数を調べてみると、平均七、八匹き。〔B〕、食べものにゆとりがあると、すごい速さで増える。

〔C〕区域内の餌にみあった数量に達したとき、めすウサギの腹のなかには一匹きか二匹きしか子どもがいないのである。

餌の絶対量が不足しているということをどうしてウサギが認識するのかまではわからないが、とにかく、ちゃんと調節できていて、無限には増えないようになっている。

その増え方がちょうど収支とんとんのところだとどまれば、全員がてきとうに食べていけるわけだが、ときどき定量オーバーしたり、餌のほうに自然に減ったりすることはザラだから、そうなるととたんに飢えてしまう。だからうまくいってもトントン、だいたいがギリギリで生きていられるという限界すれすれの状態がつづく。

このように自然界では、飢えるというのは当たりまえのことであつて、ただ人間にとつても動物にとつても、飢えは非常にづらいことであるから、できるだけ楽をしたいという「願望」がつねにあるといえる。〔ア〕

動物にとつて、飢えるということは非常にづらいことなので、で

ると、体の生理機能とは逆なところで、欲望は満足したけれども体が悪くなつてしまうということになるため、こんどは、飲食やら栄養過多から生ずるさまざまな病気と共存して生きなくてはならない事態が発生する。

こんにち、いわゆる平均寿命が伸びるという妄念の内実として、こうした問題が急速に進行している。これが現在、いちばん問題にしなければならぬことだ。

成人病とは大人のかかる病気かと思つていると、最近では小・中学生まで、過食による病気では成人の仲間入りである。はやばやと体は成人になり、ガタが来て、しかも精神のほうは幼稚のままという出来そこない人間がやたらと増えていく。

現在のような飽食・美食状況が、はたしてこのままつづくのか、つづいた結果どうなるのか、正確に予測できる人がいなかったが、自然界の因果関係から、かなりの示唆は得られるはずである。

動物の生きざまのなかで、最も理想的な姿を思い浮かべるとしたら、それは、シベリアの原野を餌を求めてうろついているオオカミでも想像してもらえばいい。

牙をむき出し、ギラギラと眼を光らせ、空腹に耐えながらエモノを追うのだが、しかし「本人」はべつに悩んでいるわけではなく、これが当たりまえだと思わない。

これが動物の正常な姿なのであつて、この状態のとき彼らの生命機構は最もよく作動するようにできていると考えればよい。シベリアの原野には、少なくともブタのように太ったオオカミは存在しない。たとえ太ったオオカミになりたいと思つたとしても、環境がそうはさせ

ないのである。

自然界にはそういうことは今まであり得なかったからというので、
③ 太るほうへの警告の「赤ランプ」は用意されていない。

しかし、飢えのほうへ進行すると、ただちに「赤ランプ」がつく。
たとえばかなり腹が減つてくると、キリキリと胃が痛むとか、空腹
感にさいなまれるといった、なんらかの徴候が体に生じてくる。そろ
そろゴハンを食べなくちゃいかんぞ、というようにパツと赤ランプが
つくわけだ。

これに対して、食べ過ぎるということは、一時的にはあるとしても、
永続的にはありえないため、少しずつ食べ過ぎていくという過程に対
する警告装置が、自然界では必要とされていないのである。

食べすぎるということが本来あり得ないために、警告の赤ランプが
用意されていないという自然界の法則が、不幸にしていま、人間とい
う動物の上に君臨している。

たしかに、一時的には、大食・美食の結果、気持ち悪くなって吐く
とか下痢をしてしまうといった変調は現われるが、少しずつ長期にわ
たる過食に対する警告装置がもととないために、肥りすぎの果てに、
まるでインソップ物語の蛙のようにパンクしてしまう状態に置かれてい
る。

これ以上食べすぎると糖尿病にやられるぞ！ いいかげんにしとか
ないと脳卒中で倒れてしまうぞ！ そうした自動警告装置は、何度も
くり返すけれど自然界に用意されていない。

⑤ こうしてわれわれ現代人は、反自然的な行為にますます拍車をかけ
ている。

(西丸震哉『食べ過ぎて滅びる文明』角川書店より)

問四

——線部①「腹いっぱい食べることができた時期もあったか
もしれないが、それはほとんど「瞬間的」なことと、すぐにだめ
になってしまった」とありますが、それはなぜですか。その理由
として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 同種の動物が周囲に増えると、餌の絶対量の不足を予想して、
それぞれが食べる量を調節することになるから。

イ 複数の種類の動物が同じ行動範囲内にいれば、餌をめぐる縄
張り争いに負けてしまう動物も出てくるから。

ウ 食べただけ餌を食べていけば、当然その場所にあった餌は
すぐになくなってしまふから。

エ 餌が多ければそれに比例して動物の数も増え、増えた動物が
同じ場所の餌をすぐに食べつくすことになるから。

問五

——線部②「こうした問題」とありますが、この具体的な内
容が書かれている部分を文中から四十字以内でぬき出し、初めと
終わりの五字を答えなさい。

問六

——線部③「太るほうへの警告の「赤ランプ」は用意されて
いない」とありますが、それはなぜですか。文中の言葉を用いて
三十字以内で答えなさい。

* 本文は設問の都合上、一部表記を改めてあります。

※1 妄念……誤った思いこみから生じる執念。

※2 飽食……腹いっぱい食べること。

※3 示唆……それとなく教えること。

問一

次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり

イ むしろ

ウ すると

エ ところが

問二

最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア I 質・II 量・III 量

イ I 量・II 質・III 質

ウ I 量・II 質・III 量

エ I 質・II 量・III 質

問三

本文には次の一文がぬけています。もどす位置として最も適当
なところを文中の【ア】～【エ】から選び、記号で答えなさい。

そこで常時、ある程度飢えているというのが、この動物界の
自然の摂理というわけだ。

問七

——線部④「警告の赤ランプが用意されていないという自然
界の法則が、不幸にしていま、人間という動物の上に君臨してい
る」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なもの
を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 長期の過食に対する警告装置がないために、人間は無自覚な
食べ過ぎを続け、健康を害してしまっていること。

イ 量が満たされれば質の向上を求めるように、人間は食べ物に
対して限らない欲求を抱きがちだということ。

ウ 人間は食べ物に困らなくなった一方で、食べ過ぎることを自
制する人間本来の生命機構を失ってしまったということ。

エ 満ち足りた食糧事情から、人間は飢えることへの警告とは無
縁となり、命を守るための本能が衰えてしまったということ。

問八

——線部⑤「反自然的な行為」とありますが、これはどのよ
うなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答え
なさい。

ア 動物の生命機構は飢えている方がよく作動することを知らな
がら、現代人は飢えを避け続けていること。

イ 食に対する欲望の強さを自覚しているにもかかわらず、人間
は自然界のあらゆる動物蛋白質を取りつくそうとしていること。

ウ 現代の人間は、食べ物の量や質を際限なく追求しながら、有
り余るほどの食事をとり続けていること。

エ 行き過ぎた大食や美食に対して警告装置が赤ランプをともし
ているにもかかわらず、人間は暴飲暴食をやめないこと。

(問題は以上です。)